

集英社文庫

それからの武蔵Ⅰ

—波浪篇—

小山 勝 清



集英社



集英社文庫

それからの武蔵 I 一波浪篇一

0193-750363-3041

昭和55年10月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります

昭和56年2月25日 第4刷

著者 小山 勝 清

編集 株式会社 一ツ橋企画

東京都千代田区一ツ橋2-2-5
〒101

発行者 堀 内 末 男

発行所 株式会社 集 英 社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101

電話 東京 (230) 6361 (編集)
(238) 2781 (販売)

印刷 廣済堂印刷株式会社

著者と了解のうえ検印を廃します。(落丁本・乱丁本はおとりかえします。)

© K.Koyama 1980

Printed in Japan

集英社文庫

それからの武蔵_I

一波浪篇

小山勝清



立つ 鳥

一

慶長十七年四月十三日、この日のことを当時小倉こくらの城主であった細川家ほそかわでは、こう伝えている。朝、下関からこぎ出した武蔵むさしの小舟が、船島ふねじま（今の巖流島）の沖合に現れたのは、約束の辰たうの上刻（午前八時）を、二時間もすぎた巳みの刻（午前十時）近いころだった。

船島は、一にぎりほどの不毛の小島、浜辺にそうた百坪あまりの青草原が、定められた今日の試合場だった。うしろには、まん幕をはりめぐらし、家老の長岡佐渡ながおかさどをはじめ、検分役の歴々がひかえ、まわりは、点々、足軽どもが固めている。

舟は海峡の波をきって、ぐいぐいと進む。

武蔵は、すわったまま、じっとまん幕のあたりを、うかがっている。近づくにつれ、色めきたった役人たちの気配が、つよくせまってくる。中にするどい一筋の剣気。武蔵は、小次郎こじろうの姿をさがし求めているのだ。

巖流佐々木小次郎がんりゅうささきこじろう。彼は今、小倉の城主細川忠興ただおきに抱えられ、九州の麒麟きりんとうたわれているが、剣名は、宮本武蔵とやらんで、広く全国になりひびいている。

人々は、武蔵といえ、小次郎を思い、小次郎といえ、武蔵の名をあげる。すでに少年の頃

から剣客としてきこえ、相似た剣歴をもつ宿命の競争者だった。

ともに門閥も背景もない。頼むはただ実力、孤剣をひききざりて名門、剣豪に試合をいどみ、これを打破っていくほかに、出世の道をもたぬ浪人であった。しかも武蔵は、京都の名門、吉岡兄弟との試合を初めとして、名ある剣客と立ちあうこと五十数回、未だかつて一度も、おくれをとったことがない。一方、小次郎も、諸国の剣豪をなぎ倒し、ついには將軍家の指南番、小野次郎右衛門をくだし、これ又一度も破れたことがなかった。

こうして、同じ出世の街道を驀進する、青年客氣の二剣士は、半ば世論にあやつられて、いつしか私怨にも似た、はげしい敵対の感情をいだくようになったのである。

舟は、浜辺まであと二十間あまり……。

「あつ、いけねえ」

とつぜん船頭が叫んだ。ずず、ずう……舟底が洲さきにのりあげたのだ。と、またこの時である。かなた、まん幕の中から、ひらりと飛び出した一人の壮漢。武蔵は、これを見てはっと息をのんだ。猩々緋、真紅の袖なし羽織に染め革のたっつけ袴、紺の足袋に草鞋、高く結いあげた漆黒の総髪、長刀を小脇に抱えた見事な若者、いきなり、こちらをめがけ颯爽とかけ出したのである。

「おう、佐々木様だ！」

船頭が、あわてて叫んだ。

「うん、小次郎だ。よめたぞ！」

武蔵は、すつくと立ち上った。白羽二重の袷に、西陣茶色の角帯、特にこよりをつないだ細ひもを、たすきにあやなしている。刀は大小ともおびず、短刀だけ前半にたばさみ、左手には、今

朝下関の宿で、使いふるした艀ろをもらいうけ、手ずから作りあげた、四尺二寸の木刀をひっさげている。この木刀は、今に、肥後熊本ひごくくまもとの金峰山麓きんほうさんろく、松尾村の雲巖寺うんがんじに保存されているが、到底常人がふりまわせるような、なまやさしい代物しろものではない。

武蔵は、袷あはせのすそをからげ、ざぶりと水中におり立った。

二

水は、脛はざを没するほどの深さだった。

武蔵は、ざぶざぶと、潮を押しわけながら、帯にはさんだ手拭をとって、一重に鉢巻をしめた。と、細川藩士の記録「二天記」に書いてある。

この事は、さすがの武蔵も、いささかあわてていたことを物語っている。武蔵は、小次郎がまゐ幕からとび出し、駆けよってくるのを見て、

「さては小次郎、水ぎわに出て、迎えうつつもりだな」

と、見やぶったのである。そうなると、地の利は絶対に小次郎にある。そこで、そうはさせじと、自分も、いそいで水中にとびおりたのだ。しかし、やや進んだころ、武蔵は、

「あぶないっ！」

と心中で叫んで足をゆるめた。小利をあらそって、心の平静を失うことの愚に、卒然と思いつたのである。もしかしたら、わざと駆け出して、相手の虚をつく、小次郎の術策じゆつさくかも知れないのだ。

今、太陽は雲にかくれているが、武蔵は、その太陽をうしろにしている。

「馬鹿っ、何をかあわてる」

武蔵は、五尺九寸の長身に、日輪をおい、一步一步をふみしめてゆっくり歩みを進めた。あと二十歩、すでにして、小次郎は水ぎわに立ちはだかり、物干竿と言う三尺二寸の長光^{ながみつ}をひきつけ、「武蔵見参！」

と、声高に呼ばわった。

水はもう、くるぶしをひたすぐらい。

「おう、小次郎よなあ」

武蔵も、きつと答えて突っ立った。

四つの目が、火花をちらしてぶつかった。しかし、意外にも、憎しみの色はなかった。思えば不思議、たがいに闘魂をもやして、相求めること数年、遭うは今日が初めてなのだ。これが武蔵か！ 小次郎か！ と、二人は、讃嘆しあうように、顔を見合わせた。

武蔵は二十八、小次郎は二十六歳、背丈はほとんどかわらない。武蔵の顔は、冷たく蠟^{ろう}のように白く、小次郎の顔は、はなやかに桜色だ。

もし、この二人が、別な条件、環境の下で会っていたなら、戦うまでもなく、たがいに剣技を認めあって、友人になったかも知れない。いや、今日の日が半年のびていたら、ついに戦う日は来なかっただろう。すでに小次郎は細川家に仕え、武蔵もまた、近く某家に抱えられる話もちあがっていたのである。互いに主をもつ身分となれば、こうもたやすく、命をかけた試合はゆるされないのである。

だが、今は是非ない。一しゅんの後二人の眼は、憎悪と反感に、かっと燃えあがった。つもりもった闘志の激突だ。もはや技をくらべるといのではない。相手の血をもとめ、魂までも斬り伏せんとする必殺の眼である。ただ、小次郎は、もち前の覇氣^{はき}にまかせて、火のように燃え、

武蔵は、内に秘めて、氷のように冷やかだ。

「武蔵！」

「……………」

「む……武蔵！」

小次郎は、あふるる侮蔑の念をこめ高飛車^{たかびしや}に吐きすてた。

三

「武蔵！　なんで約束の時間をたがえた。それが兵法者の作法か！　恥を知れ、恥を……」
絶対有利な地歩を占めた小次郎は、勢いにまかせて、毒舌をたたきつけた。

小次郎は、剣をとっての豪の者であるばかりでなく、弁舌の雄でもあった。彼が、とうとうと、まくしたてる雄弁は、聞く者を圧倒し、翻弄^{はんろう}し、信頼と尊敬を勝ち得るに充分だったし、毒舌は、時に相手の肺腑^{はいふ}をつらぬき、戦わずして敵を慍伏^{しんぷく}させる魔力をもっていた。

「はっ、はっ、はっ、はっ、……いや、これは、きさまの奥の手だったんだ。あ！　知ってるぞ武蔵！　一乗寺下り松の時といい、三十三間堂の折といい、あわれ名門、吉岡一家は、きさまのこの手にかかって潰え去ったのだ。だが、笑わせるぞ武蔵！　その手をわれに用いんとは——かかる児戯^{こぎ}に類した術策に、うかうかと乗る巖流だと思うか！」

小次郎は、せせら笑ったが、ふと、ぎくりとして、ひっさげていた長刀の柄^{つか}に手をかけた。折から雲間をはなれた太陽がきらりと彼の目を射た。そして、立ちほだかった武蔵の姿が、倍ほども大きく見え、今にも、のしかかってくるように感じたからである。

小次郎は反射的に、

「来るか！」

と叫んだ。武蔵は無言、静かに櫓の木刀を正眼せいがんにとった。

「来い！」

小次郎は、いきなり長刀を抜きはなつと勢いあまって、左手に残った鞘さやを思わず投げすてた。

鞘は、海中にとび、ざあと波に洗われた。

と、見るや武蔵は、にとほほえんだ。すばらしい反撃の言葉が見つかったのである。武蔵は、小次郎の悪口あつこうぞうごん雑言を、だまって聞き流したが、けっして愉快ではなかった。

「小次郎！」

「な、なんだ？」

「試合は、お前の負けだ！」

「な、なにを……」

「勝つ試合なら、なんで鞘をすてた。もはや運命きわまったぞ！」

「こ、こいつ、何のたわごと……」

小次郎は、思わぬ反撃に青ざめ、ぶるっと怒りにふるえた。彼はもう水ぎわに立って迎えうつという初めの計画もうち忘れ、ざぶと水中に片足をふみこんだ。

武蔵は、その出ばなをおさえて、木刀を突きつけ、ずうっと進み出た。

物すごい気魄きぱく、小次郎はおされ、たじたじと後にひいた。三步、四歩、五歩……とたん、武蔵の長身が水をけって舞い上った

「おう！」

小次郎は、腰をひねって拝みうち、宙に浮いた武蔵のみけんに斬りつけた。武蔵の木刀も小次

郎の脳天に落ちかかった。

がっ……にぶい音がした。武蔵がしめた鉢巻が、ハラリと地に落ちた。

小次郎は、二、三步よろめくと、あおむけに、ばったり倒れた。

四

それは、実に一しゅんの激突！ 小次郎が憤激のあまり不用意にふみ出した、その虚に乗じた武蔵の電撃が、ついに勝敗を決したのである。

武蔵は、これまでも大事な試合は、常に一撃をもって、相手を倒した。今度も武蔵は、その一撃をねらったのである。

しかし、その勝敗は、紙一重のちがいだった。さすがは小次郎、斬りおろした長刀のきつ先は、武蔵がしめた鉢巻のむすび目を、水もとまらず切って落したのである。

だが、そこに、武蔵が、わざわざ臈をけずって四尺二寸の木刀を作った、用意のほどがうかがわれる。三尺二寸の長光と、四尺二寸の木刀の長短が、勝敗を決したともいえよう。

かくて、ついに試合は終った。小次郎は倒れた！ と、誰の目にもそう見えた。長岡佐渡をはじめ、検分の役人たちは、あっと声をあげてかけようとした。しかし途中で、佐渡が、

「待てっ」

と、叫んでおしとどめた。

何たることぞ、武蔵は、決戦の構えを、いささかもくずさず、倒れた小次郎に木刀を突きつけ、じりじりと迫っていくではないか。

「さては、小次郎、ただころんただけだったのか？」

役人たちは、息をのんだ。

しかしよく見ると、やっぱり小次郎の頭はうちくだかれ、血汐は赤く額をそめている。ただ、まったく息絶えておらぬ証拠に、かっと目は見開き、胸のあたりが大きく波うっている。しかし勝敗はもう明らかである。

「この上、一撃を加えずとも……」

佐渡は、こう考えた。

「勝負見えた、武蔵やめい！」

佐渡は、あわや声をかけようとした。が、一しゅん早く、がばと半身をおこした小次郎の長光が、さっと横にひらめいた。武蔵は足がかめてとびあがりぎまに、びゅうっと木刀をふりおろした。小次郎の長刀は、たれさがった武蔵のすそを、三寸ほども切りさいただけだったが、武蔵の木刀は、無残！ 小次郎の胸部を**ごぼ**とうちくだいた。

小次郎は、鼻口からどくどくと血をふきだし、どたりと又、あおむけに倒れた。目はまだ怨みに燃えて大きく見開いている。しかし、もう、みじろぎもせず、死相は急速に、小次郎の顔をおおった。それでも武蔵は、なおも、しばらくはじつと木刀を突きつけていたが、やがて、つと身をかがめて、手のひらを、鼻口にあて、顔を近づけて呼吸をうかがった。むろんまったく息たえている。

武蔵は、すつくと立ち上った。そして、全身の血が氷りついたかのように、青ざめて立ちつくしている役人たちに軽く一礼すると、くるりときびすを返して、元きた海中に足をふみこんだ。佐渡も、ぼう然と見おくれた。

わずかの間であったが、潮流は向きを変え、下関へ向かって、うずをまいて流れている。船の

へさきも、沖へ向けなおしてある。武蔵は、ひらりと跳びのった。船頭が、齒の根もあわずがたがたふるえている。

「だ、旦那、お、おめでとうございます」

「うむ、いそげ」

武蔵は、にこりもしない。無事下関の宿へひきあげるまでは、まだ完全な勝利とっていないのである。

波 は 紋 もん

一

細川忠興ほそかわただおき（三斎さんさい）が、丹後たんごの宮津から、豊前ぶんぜん三十九万石の領主として、小倉に入ったのは慶長五年である。その時まで小倉は、町のかたちさえない一寒村であったのが、慶長七年、忠興が築城の工事をはじめると、急速に発展し、同十三年、東西十八町、南北十二町、五層の天守閣を中心に、櫓やぐらの数百四十八という雄大な城が完成した頃は、民家七千を越える堂々たる城下町になっていた。

忠興の奥方玉子は、関ヶ原合戦の前、大坂玉造たまづくりの屋敷で、石田方の軍勢に囲まれ、自刃じじんしてはてた有名なガラシャ夫人である。そんなことで、忠興自身はキリシタンではなかったが、その

保護者といわれ、夫人亡きあとは妻を迎えず今日まで通している。嫡子ちやくしの忠利ただとしも幼い時から徳川方へ人質にとられ、今は將軍秀忠ひでただに仕えて江戸に住んでいる。

彼は父幽齋ゆうさいと同じく、茶人、風流人として聞え、外面はおっとりしているが、さすがは歴戦の武将、筋金はちゃんと通っている。それに、なぜだか江戸にいる忠利が氣にくわず、難題をもちかけて困らせたというから、かなりなすね者であつたらしい。

「これ！ もう巳の刻もすぎた。まだ知らせは参らぬか—

忠興は、いらいらして、もう何度もきいた。むろん今日、辰の上刻に行われるという、佐々木小次郎と宮本武蔵のことが氣にかかるのである。忠興ばかりではない、つめかけた家臣たちも、勝負いかにと、待ちわびているのだった。

小次郎が九州に下ってきたのを機会に、兵法指南として召し抱えたのは、忠興自身である。それからまだ一年足らずの時日しかたっていないが、小次郎の人氣は圧倒的、家中の若者はこぞつて、小次郎の門に入り、年輩の藩士、重役連も、劍といい、人柄といい、正に天下第一と折紙をつけた。忠興は得意である。自慢の家臣として、何かといえ、彼を召し出して、多彩な彼の兵法談を聞くのが楽しみだった。

そこへ、とつぜん武蔵が試合を申しこんだ。今は細川家のお抱えだから、主君の許しを受けねばならぬ。そこで、かつて、武蔵の父無二齋むにさいの門人だったという一の家老長岡佐渡が、武蔵の意をうけて、忠興へ願ひ出たのである。

忠興は、むろん、ただちに許可を与えた。それはただ小次郎の勝利を信じていたからばかりではない。かねがね小次郎から、あしざまに聞いていた武蔵の行状、その武蔵をまた、江戸の忠利が支持しているということも、忠興が一も二もなくこの生死をかけた試合を許した要因であつた。

しかし、試合の期日が切迫するにつれ、忠興は次第に不安がつつた。武蔵について、だんだん集ってくる噂をきけば、かならずしも小次郎がいうような田舎いなかまわりの卑くつな兵法者ではないようである。

「佐々木様とて、油断はならぬぞ」

不安は、また門人の中にもひろがった。そして、万一の事があれば、おっとりかこんで武蔵を討ちとれと――よりより協議をはじめ、忠興も、大藩の手前、一応は公平を期して警備を厳にしたが、

「もし、武蔵に卑怯なふるまいがあれば……」

と、内心ひそかに考えていたのだった。

二

船島をひきあげた長岡佐渡は、そのまま登城とじょうして忠興の前に出た。すでに試合のあらましは、早船で知らせてあったので、つめかけた家臣たちも、惨さんとして声なく、ただ一人の武蔵びいきといわれている佐渡を、じろりと迎えた。

忠興は、ひどく不機嫌だ。佐渡が座につくのも待ちきれず、

「佐渡！ 試合のもようは聞いた。武蔵は、定めの時刻を一刻もおくれて参ったというのはまことか？」

と、はげしく問いつめた。

「されば……」

佐渡は、これだけいって、自分も困ったような顔をした。実際のところ、佐渡は昨日から気の

もみ通しだ。武蔵が試合の交渉中、足をとめていた下関の船問屋、小林太郎左衛門の家から、迎えられて佐渡の邸に移ったのは一昨日十一日のことである。試合は十三日辰の上刻行ふこと、場所は船島ときまり、小次郎は特別仕たての忠興の船で、試合場に渡ることになっていた。非常な優遇である。そこで佐渡は武蔵に、いくらかでも、ひけ目を感じさせたくないという心づかいから、武蔵を、自分の船で送りこむつもりだった。佐渡は筆頭家老で二万三千石、年は三十五歳だが、剛腹で思慮も深く、忠興も一目をおく大人物であることは、これでもわかる。

ところが、その武蔵が昨日の夕方になって、ふっと邸から姿を消してしまった。市中、くまなく探したが見つからぬ。早くもこの事を聞きつけた家中では、

（武蔵は小次郎を恐れてとん走した）

と、もっぱらの評判である。

ふと思いついて、佐渡が、下関の船問屋に使いをやって見ると、案の定、武蔵は悠々その家におさまっていて、

——明朝試合の儀につき、私こと、御もと様の御船にて船島につかわし下さる趣き、重ちしやう畳じやうの御心遣い、かたじけなく存じ奉り候たまつそうろう。しかれども、小次郎は敵対の者にござ候。しかるに、小次郎は、忠興様御船にてつかわされ、私はそこもと様御船にて、つかわされることと相成りては、御主人に対し、いかなるものと存じ奉り候。よって御船の儀は、幾重にも御ことわり申し上げ候。明朝は、ここもと船にて、よき時分に参り申すべく候。左様おぼしめし下されたく候。以上。

と、返事をよこした。

佐渡は、ほっと安堵したばかりでなく、武蔵の深い思いやりをうたれたが、さて、いよいよ

よ今日、試合場にのぞんでみると、前記のとおり、当の小次郎よりも、佐渡の方がいらいらして、二度も催促の船を出した始末である。

それでも、二時間もおくれて、やっと乗りこんだと思うと、せっかく地ならしまでして設けた試合場はそのけ、水ぎわの砂浜でぱっぱと勝負をつけてしまった。そして、声をかける隙もあたえず、ひきあげてしまったのである。

佐渡は、ねらった鳥を、あっけなくとり逃がした獵師のように、ぼうぜんと見おくったが、やがて、はっと胸をつかれた。

「うむ、そうだったか」

佐渡はようやく武蔵のとった作戦がのみこめ、不愉快な気もちが消えた。しかし、今いきり立っている忠興に、武蔵がとった戦法の正しさを、なっとくさせるのは容易でない。

「佐渡！ どうじゃ？」

「されば、殿……」

佐渡はせきたてられ、きつと目をすえて膝をのり出した

三

忠興は、武蔵にいささかでも兵法者の道にはずれた振舞があれば、小次郎の門人どもに武蔵を討ちとらせてもよい。名目も充分立つと考えている。家臣たちの多くも、そう思っている。

その第一の不審が、故意に、試合の時刻におくれたこと――。

佐渡は、むろん、これを察している。

「されば殿、武蔵が、取りきめの時刻を、たがえたことについては、かく申すわたくしが誰より